

松田浩志 亀田美保

三訂版

三五

本

日

字心綴上



三訂版

上級で
学ぶ
日本語

テーマ別

松田浩志 亀田美保

KENKYUSHA

まえがき

『中級から学ぶ日本語』『上級で学ぶ日本語』両テキストは、「テーマ別」との愛称で、初版以来 20 年を超す長きにわたり、国内外の日本語教育機関や地域ボランティア活動の現場などで、指導に当たられる先生方、また学習者の皆さんと多くの方々からご支持をいただいてまいりました。

『中級から学ぶ日本語』の方は、2014 年に「三訂版」として再改訂をいたし、幸いにして旧版同様に受け入れられ、広く活用していただいております。その後、「テーマ別」をご利用いただいている皆様からは、姉妹編である『上級で学ぶ日本語』の再改訂も是非というお声をいただき、このたび本テキストを出す運びとなりました。

再改訂の詳細は、次ページからの説明に譲りますが、日本語教育の分野では、時代の変化とともに、学習者層、学習ニーズ、さらには学び方などが大きく様変わりしており、このたびの改訂作業においても、それを反映させ大幅な改訂となりました。15 課すべての本文を新たに書き下ろすと同時に、本文の長さや使用語数、新規学習項目数の制限、漢字の提出方法などを工夫し、より効率の良い、しかも効果のある日本語学習に役立つことを目指しました。

「テーマ別」出版以来掲げてきた「学習者が身の回りの出来事に興味を持ち、それが動機となりより積極的に日本語学習に取り組んでくれる姿勢を育てる」という編集方針の基本は変えることなく、それに即した構成を目指し、改訂作業を続けてきました。その間、実際に「テーマ別」が使われている日本語教育現場にも足を運び、指導に当たられる先生方とお話をさせていただき、このたびの再改訂版にその結果を可能な限り反映させていただきました。その意味では、当再改訂版はお話をいただいた皆様との共著書でもあり、有意義な示唆、ご助言をいただいたこと心底より感謝いたしております。

『テーマ別 上級で学ぶ日本語』の三訂版が、これまで以上に指導現場で活用され、少しでも日本語教育に資することができれば、著者望外の喜びです。

2016 年 11 月

著 者

『テーマ別 上級で学ぶ日本語』を使っただく先生方へ

1. 『テーマ別 上級で学ぶ日本語(三訂版)』の概要

1) 対象とする学習者像

『テーマ別 上級で学ぶ日本語(三訂版)』(以下『上級』)は、『中級から学ぶ日本語(三訂版)』(以下『中級』)、あるいは、同程度の日本語学習経験者を想定して編集されています。

具体的には、日常生活での必要なやり取り、学習者自身のことや身近な場所で起こった出来事について説明したり、意見や感想を文にできる段階を経験した学習者です。

2) 『上級』が目指す到達目標

『上級』では、主に、以下の2点を到達目標とします。

- ① 日常身近に体験する出来事や社会的な話題について、自分の感想や考えが理由とともに詳しく説明できること
- ② 異なる視点や考え方を持つ相手とも、興味・関心を持って適切な表現で情報や意見の交換ができること

そして、これらの到達目標を達成するために、学習の過程で次のような技能を伸ばしたいと考えています。

- a) より複雑な文の構造を理解し、適切な接続により、まとまった内容の文でやり取りできること
- b) 文章の構造を理解し、まとまった内容の文章を読み書きできること
- c) 理解できる漢字および語彙を増やすとともに、適切に使用できる漢字や語彙・表現の範囲を広げること
- d) 発話意図、スピーチレベル(書き言葉、話し言葉)、場面などに合わせて適切に表現を使い分けられること
- e) 自らに関係する諸問題について、自分なりの見解を持ち、それを相手が納得するように説明でき、また、異なる視点を持つ者と適切な意見交換ができること

2. 『上級』の構成

『上級』は、それに準拠する『ワークブック』(以下、『ワーク』)との併用で、「読む」、

「話す」、「聞く」、「書く」のいわゆる4技能の運用力、応用力を伸ばすことを目指して構成されています。以下に、いくつかの特色と思われる点を説明します。

1) テーマの設定

「語学学習の動機づけの大きな要素のひとつが学習者の興味である」という編集方針に基づいて、『中級』同様、各課に学習者が興味を持つ、あるいは、持ってほしいと考えられるテーマが設定されています。テーマ選択の基準は、学習者同士が、また、教員と学習者が共有できる身の回りにある諸問題を選ぶこととしました。例えば、言葉の役割、健康管理など日常生活と深く関わる問題、無関心社会の形成、平和実現への営みなどの地球規模の問題などを取り上げました。テーマに掲げた問題点を学習者と共有し、日本語学習の更なる動機付けを目指しています。

2) 既習項目と新規学習項目の明確化

新規学習項目は、すべて各課〈読みましょう〉の本文で提出し、その他のセクションでは語彙・表現、文法項目など一切の新規学習項目は出てこないよう構成されています。教える側が学習者の既習項目を把握することによって、教室で教員が口にする耳慣れない表現が、学習者にとっては新規学習項目となることを目指しています。本文で新規に学習した項目は、〈使いましょう〉の例文や『ワーク』内の練習でできるだけ反復練習、応用できるように工夫し、全体の構成が考えられています。

3) 新規学習項目数の制限

各課に新規に導入される漢字数は、多くても30文字前後とし、非漢字圏学習者を考慮しています。下の「各セクションのねらい」〈漢字を練習しましょう〉の項を参照してください。

本文は、以下に詳しく述べるように、新出語彙・表現の数と語数が制限されています。課が進むに従って少しずつ増やす工夫がなされ、原則として応用範囲の広い語彙・表現が取り上げられています。

4) 「会話」の扱い

『中級』同様、『上級』でも、いわゆる「会話」を練習することを目的とした練習は設けられていません。「テーマ別」では、教育現場で学習者に発話の必然性を感じさせる授業が行われ、教員と学習者の間でのやり取りをすることが、真の会話力の養成になるとの考えからです。但し、会話独特の表現を学ぶことは必要であると考え、それは『ワーク』で扱うこととしました。

3. 『上級』各セクションのねらい



一緒に考えましょう

各課に設けられたテーマは広範な問題を含むテーマですが、このセクションでは、そのテーマのどこに焦点を合わせて学習を進めるかということを示し、さらに焦点へ誘うような設問を準備しました。単に、質問に答えさせることを目的とせず、学習者が新しいテーマの学習を始めるにあたり、そのテーマについて、その時点でどのような知識を持っているかを、教員側、学習者側双方が確認する形で扱えるような設問が並べられています。

別冊『上級で学ぶ日本語 教え方の手引き』（以下、『手引き』）に、テーマの焦点、〈一緒に考えましょう〉設問の意図が添えられています。



新しい言葉

本文に出てくる順に新出語彙・表現を提示してあります。原則として、本文で使われている形、例えば、「見向きもしない」（4課）は「見向く」という頻度の低い辞書見出しを載せるのではなく、「見向きもしない」という形で載せられています。また、学習者の参考になるように、名詞は、スル動詞として使われる単語には、「移動スル」（2課）と表示し、な-形容詞と呼び習わされている語は「ちぐはぐナ・ニ」（6課）のように表示されています。

さらに、単語としては既習項目であるが、表現としては新規学習項目と考えられる表現（3課「納得がいく」など）は、〈新しい言葉〉に載せています。今回の改訂では、意識的にいわゆる慣用的な表現（2課「耳を澄ます」など）や学習者にとっては難しい擬音語・擬態語の類（1課「きらきら（と）」など）をできるだけよく使われる文脈で紹介することを試みました。

〈新しい言葉〉に新規学習項目として載せられている新出語彙・表現の数は、60～70前後になっています。新出語彙・表現の多さが、学習の障害にならないことを考慮しつつ、より応用範囲の広い語彙・表現の選択が選択されています。尚、指導の現場で、テーマに関連して是非必要と考えられる場合には、学習者のレベルに合わせて（たとえば、5課では意図的に「冤罪」を載せなかったが必要なら）補足していただければと思います。『手引き』には、新出語彙・表現を導入する際の留意点が例をあげて述べられています。

〈新しい言葉〉では、初級段階で既習であろうと考えられる語彙・表現と『中級』での学習項目を既習語彙・表現とし、その中に含まれない項目を新規学習項目として扱っています。但し、食べ物、動植物名、国名などやコンピュータ、ビデオ、コンビニ、スーパーなど既知と考えられる言葉も既習扱いとしました。

「テーマ別」を『上級』から使い始める学習者の中には、〈新しい言葉〉に載せられていないもので未習項目があるかもしれませんが、極めて少数だろうと考えられますが、教室で補足していただければと思います。

〈新しい言葉〉で取り上げた語彙・表現には、既習、未習にかかわらずすべての漢字にルビがふられています。



読みましょう

〈読みましょう〉には、①テーマの紹介、②新規学習項目の提示、③読解力の補強という3つの目的を持たせました。上で述べたように、新規学習項目は〈読みましょう〉以外には出てきません。また、各課の本文は、1～7課までは4段落、それ以降は5段落の構成としました。本文全体の長さは、1000～1250文字の長さに収め、課が進むにつれて字数が増える構成になっているのは、上で述べたとおりです。本文中のルビは、新出漢字のすべてに振ることを原則としました。

各課の〈読みましょう〉の音声は、研究社 HP(「研究社 ダウンロード」で検索してください)より無料でダウンロードすることができます。また、『手引き』には、教室でお使いいただけるよう、同内容の音声を収録した CD が付いています。



答えましょう

本文の理解度を確かめるために A、B の2つのグループに分け、A では基本的に各段落に関する質問が用意されています。その後、B で、読解力をつけるのに必要と思われる、「行間を読む」類の質問を設け、テーマの趣旨を問えるよう構成しました。



まとめましょう

A、B に分け、前者では段落ごとにキーワードを与え、〈答えましょう〉の答えを参照して段落のまとめができることを目指しています。B では、A を基に、本文全体をまとめる練習です。A、B とも口頭でまとめをした後、文に書かせる練習ができるようにした練習でもあります。



使いましょう

本文で提示した新しい文法項目の練習です。多様な機能を持つ表現も含まれていますが、使用頻度の高い典型的な用法を練習するよう作られています。既習項目であるが活

用できていない項目を取り上げた練習も含まれています。

各項目の例文の中に、()を付して添えられた部分がありますが、その項目を理解するのに学習者の助けになるのではと考えられた部分です。たとえば、1課〈使いましょう〉Aで取り上げた「～ことなく」の例文には(普通は～はずだが)と入っています。「～ことなく」を使う言い方は、どんな気持ちで、何を伝えようとして使われるのかを考えながら練習できることを目指した注釈です。()の部分は、学習者が書いたり、口にしてもおかしい文にならないことを考慮して添えられています。

〈使いましょう〉の練習問題には、既習語彙・表現、文法項目を使って例文、練習指示の文が出されています。また、『上級』の先行課で取り上げた練習項目をできるだけ例文等に使い、反復練習につながることを目指されています。学習者が、例文をじゅうぶんに理解し、新規学習項目が何を伝えるための道具として使われるのかを考えながら練習が進められるように構成されています。

漢字の使用については、本文に合わせてあります。たとえば、1課〈使いましょう〉Aの例文3に「合格」という既習語がつかわれていますが、5課で「合(ごう)」の読みを練習するまでは、「ごうかく」とひらがなが使われています。

『手引き』に、上で述べられた()部分の意図の詳細、〈使いましょう〉の各項目をどこまで、どのように教えればよいと考えられるかなどという点が、練習の解答例とともに詳しく取り上げられています。



話しましょう

学習者同士が、口頭でテーマについての意見交換をすることが目的のセクションです。上の「到達目標」で述べた「自分なりの見解を持ち、それを相手が納得するように説明ができ、また、異なる視点を持つ者と適切な意見交換ができる」力を養うセクションです。テーマに関する情報を交換して話すことによって、テーマに関する考えを深めると同時に会話の力を伸ばすことも目的としています。最終的に、ここでの成果も含めて、作文課題として使うことも目的としたセクションです。



漢字を練習しましょう

『上級』は、小学校で学ぶ教育漢字と中学校で学ぶ常用漢字が使われています。(「亡くなる」(表外読み)や「大人」(熟字訓)など目にする頻度の高いいくつかの例外があります。)

各課の〈漢字を練習しましょう〉には、A欄に新出の漢字、B欄に文字は知っているが読みが新しいと考えられる漢字が並べられています。学習者も、上級の段階になると漢

字の習得数、習熟度など多様だと思われるので、一応の目安として設けられたセクションです。取り上げた漢字数は、約 360 字でそのうち約 250 が A として取り上げられています。

新出漢字を選ぶ際に、初級段階並びに『中級』で学んでいるであろうと考えられる漢字は既習扱いとした点は、〈新しい言葉〉と同様です。